

2023_1226「落葉しない落葉樹（写真）」日々の理科 3428 号

お茶の水女子大学 サイエンス&エデュケーション研究所 田中 千尋

落葉樹が冬に葉を落とす理由の一つは「雪」です。葉が残っている状態で雪が降ると、枝だけでなく残った葉にも雪が積もって、結果的にその重みで枝が折れてしまうのです。白神山地のブナは、毎年「初雪との勝負」をしているそうです。白神山地では初雪でも大雪になることがあるので、ブナの樹は初雪前にすべての葉を落としておかないと、雪の重みでやられてしまうのです。幹そのものが倒れなくても太い枝が折れると、翌春には枯死することもあるそうです。

雪が多い地方でも「常緑針」はあります。たとえばモミの仲間は、葉にどんなに雪が積もっても、強靱でしなやかな枝のおかげで、折れることはほとんどありません。もともと「葉に雪が積もることを前提とした」樹木なのです。

東京の気候では、もともと落葉広葉樹が標準的な植生のはずです。しかし気候変動の影響で、東京にはほとんど雪は積もらなくなりました。冬はむしろ晴天の日が多く、氷点下になる日も稀なので、常緑広葉樹のほうが有利になっているように思います。都内のイチョウの木々は、もうすぐ1月だというのにまだ葉を残している木が非常に多いです。写真のイチョウは私の研究室の窓から見えるのですが、まだ半分以上の葉が残り、中には緑色の葉もあります。東京のイチョウは、いずれ常緑樹に進化するのではないのでしょうか？

(2023年12月下旬／お茶の水女子大学構内)

